ドイツ留学記（欧州のリウマチ医療とは）

はじめに

尼崎医療生協病院リウマチ科の柏木です。私はリウマチ外科学を学ぶために、2011 年 8 月からドイツを訪れ、2012 年 4 月に帰国しました。 このホームページを使い、あちらでの状況を皆様にお伝えしようと思います。一度に全てをお話しする事はできませんので、少しずつお伝えしようと思います。

公的にはリウマチ財団の第 23 回海外派遣研修医（写真 1）という形で、私的には尼崎医療生協病院の外部研修という形で、訪独の機会を与えて頂きました。この場を借りて両者にお礼を申し上げます。

平成23年度　海外派遣研修医

【 米 国　5名 】

氏名	専門	所属
笠木　伸平	内科 リウマチ科	神戸大学医学部附属病院 免疫内科　内科特命助教
古賀　智裕	内科 リウマチ科	長崎大学病院 第一内科　医員
下島　恭弘	内科 リウマチ科	信州大学医学部附属病院 脳神経内科、リウマチ・膠原病内科　講師
三輪　真嗣	リウマチ科	金沢大学 整形外科　大学院生
吉田　　健	内科 リウマチ科	東京慈恵会医科大学 内科学講座　リウマチ・膠原病内科　講師

【 カナダ 1名 】

氏名	専門	所属
松本　佳則	内科 リウマチ科	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 腎・免疫・内分泌代謝内科学 客員研究員

【 ドイツ 1名 】

氏名	専門	所属
柏木　　聡	整形外科	尼崎医療生協病院 整形外科・リウマチ科 医長

【 スウェーデン（or英国） 1名 】

氏名	専門	所属
首藤　敏秀	整形外科 リウマチ科	社会医療法人泉和会千代田病院 リウマチ科・整形外科　部長

【 スイス1名 】

氏名	専門	所属
安井 哲郎	整形外科 リウマチ科	東京大学医学部附属病院 整形外科　助教

（写真 1）

なぜ留学？　なぜドイツ？

（写真 2）

私はリウマチ学を主に新潟県立リウマチセンター（写真 2）で学びました。 そして 2007 年 4 月に尼崎医療生協病院に赴任し、リウマチ外来を開設しました。同年、ドイツより一人の医師（写真 3）がリウマチ学を学びに新潟県立リウマチセンターに留学してきました。私は彼と神戸の地で会いましたが、それはこれまでにない大きな影響を与えてくれました。自分の視野には海外など全く入っていなかったのですが、この時に初めて留学というものを意識しました。

リウマチ外科学の世界では日本・ドイツ間で 2 年に 1 回、JSRAS-ARO combined meeting という学会が開催されます。 2009 年には日本で開催され（写真 4）、多くのドイツ人医師が訪日しました。この時に留学を更に意識する様になりました。 2011 年には同学会がドイツで開催されますので、その日を訪独日と定めました。語学、身分、収入、不在の間のリウマチ外来、ひとつずつ問題を解決して、そして 2011 年 8 月を迎えました。

（写真 3）

（写真 4）

ミュンヘンにて

いよいよ出国。成田国際空港からミュンヘン空港までの飛行時間は 12 時間。荷物の重量オーバー以外に大きなトラブルは無く到着し、現地で無事に学会に参加する他の日本人医師とも合流しました。

（写真５）

（写真 6）

学会に先駆けて、ドイツ人医師と過ごす時間が数日間持たれました。 バスで移動して観光をしたり、一緒に食事をしたりして、お互いに親睦を深めていきました（写真５）。時には家族について、時には社会問題について、多岐にわたって話をしました。皆、私よりずっとご年配の方々でしたが、同じ目線で色々と話をして下さり、楽しい時間を過ごす事ができました。 また時にはビールを片手にお互い盛り上がり、見るもの、する事、話す事、全てが新鮮でした（写真６）。

最終日は JSRAS-ARO combined meeting に参加しました（写真７）。JSRAS とは日本リウマチ・関節外科学会（現、関節病学会）、ARO とは Animus Rector Opis の事で、日本・ドイツ間で２年に１回、合同学会が開催され、2011 年はドイツ開催でした。厳しい質問を受けつつも無事に発表を終え、これもまた大きな経験となりました。

ミュンヘンでの３日間はアッという間に過ぎていきました。学会に参加した日本人の先生方ともここでお別れです。

そして明日は、これからお世話になる街に飛行機で移動となります。

（写真 7）

＜Sendenhorst＞

まず私が赴いたのはルール地方にある Sendenhorst という小さな村です（写真８，９）。人口 10000 人程度で村内にはスーパー数件があるだけでしたが、少し歩くと田畑に行きつき、自然が多く静かで過ごしやすい場所でした。９月のドイツは気温 20 度程度で雨も少なく、散歩をすると心地良い秋を感じることができました。

（写真 8）

（写真 9）

ドイツでの生活は、病院の寮をお借りする事から始まりました（写真 10）。室内にはシャワー・ベッド・小さなキッチンが設置され、洗濯機も共同使用のものがあり、一人で生活するには十分な環境でした。日中は寮母さんがおりましたが、残念ながら彼女は全く英語が話せず、いつも片言のドイツ語とボディーランゲージで対話をしました。困ったときには親身になって下さり、おかげさまで快適に過ごす事が出来ました。

（写真 10）

（写真 11）

室内にはテレビもついていましたが番組はもっぱらドイツ語放送であったため、就寝前に少し見る程度でした。時々、日本の映画が放送されており懐かしさを感じることもありました（もちろんドイツ語吹替版です）。写真は「ハウルの動く城」の始まりのタイトルです（写真 11）。日本のアニメは、ドイツにおいても人気がある、とのことでした。

＜St.Josef-Stift Sendenhorst＞

ここはリウマチ内科、リウマチ外科、麻酔科、小児リウマチ科、脊椎外科、一般整形外科・外傷外科、一般整形外科・スポーツ整形外科からなる 325 床の病院です（写真 12）。

（写真 12）

（写真 13）

私の所属したリウマチ外科は Shefartz（部長）が Dr. Bause、Oberarzt（医長）が 3 名、Assistenzarzt（医局員）が 6 名、計 10 名のグループで 58 床を有します。 年間手術件数は 1474 件（人工股関節全置換術 265 件、人工膝関節全置換術 199 件、リウマチ足の手術 255 件、リウマチ手の手術 212 件）、病院全体では年間 5000 件強の手術を行っています。

完全週休 2 日制で、休暇は年間 30 日取る事ができます。子供がいると更に 2 ヶ月の育児休暇が保障されています。その為、10 名の医師が同時に集まる事は滅多になく、若干医師不足の状況で業務は行われます。

（写真 14）

月火木は 7:30 より病棟回診を行い、8:00 から手術が始まります（写真 13）。前室で麻酔医が麻酔をかけ、手術が終わる頃には次の手術の麻酔が既にかけ始められており、手術と手術の間は 30 分弱です。担当する手術が終わった者から退室し、早ければ 17:00 に帰宅します。

水金は 8:00 から医師、看護師、リハスタッフによる総回診が行われます。医師・コメディカル間のカンファレンスは無く、ここで大まかな意思疎通を図っています（写真 14）。

総回診後、9:30 から 16:00 までは外来が行われます。この病院の外来はやや特殊で、まず担当医師が診察し、その後再度 Shefartz（部長）が診察するシステムです。12:00 頃に外来を中断し、皆で一緒に昼食を摂り、そして午後の外来を再開します。1 日総診察患者が 50 名程で比較的ゆったりとした外来でした。外来終了後、カンファレンスで術前検討が行われ 17:00 頃に終了します（写真 15）。

（写真 15）